平成27年度

「小泉八雲をよむ」

感想文 作詞・詩 入賞作品集

松江市
松江市教育委員会
八雲会

文豪小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）は、松江での一年三ヶ月にわたる暮らしのなかで、当時失われつつあった古き良き日本の面影を見い出し、美しい文章に載せて全世界に紹介しました。松江市では、現在の「国際文化観光都市・松江」の礎を築いた小泉八雲の顕彰を目的とする様々な事業を行っています。

この一環として、昭和六十一年から毎年行っている「小泉八雲をよむ 感想文、作詞・詩募集」も今年で三十回目となりました。今回も、感想文二十一点、作詞・詩六点、合計二十七点の力作をお寄せいただきました。

この作品集では、応募作品のうち優秀賞及び優良賞を受賞した八点の作品を掲載しています。ぜひ多くの皆様にこの作品集をご覧いただき、小泉八雲を身近に感じる契機としていただきたいと考えています。

最後になりますが、ご応募いただきました皆様をはじめ、この事業にご協力いただきました皆様方に感謝申し上げます。

平成二十八年三月

主　催　松　江　市
　　松江市教育委員会
　　八　雲　会
後　援　毎日新聞松江支局
　　ＢＳＳ山陰放送

目　次

第30回　感想文　入賞者

★小学生の部

〈優秀賞〉

心のやみをあぶり出す

松江市立八雲小学校　五年　石　倉　　要……1

〈優良賞〉

雪は、人間です。小泉八雲は、日本人です。

東京都豊島区立仰高小学校　四年　山　田　夏　帆……2

★中学生の部

〈優秀賞〉

小泉八雲をよむ～耳なし芳一～

学習院女子中等科（東京都）　一年　前　田　はるか……3

〈優良賞〉

「雪女」を読んで

松江市立湖北中学校　二年　落　合　乃々葉……4

★一般の部

〈優秀賞〉

「停車場にて」考：現代を生きる我々が、

「父性」を取り戻すための道標として

静岡県静岡市　高　田　雄一郎……5

〈優良賞〉

戦後七十周年と小泉八雲

福岡県筑紫野市　二　宮　正　博……7

第27回　作詞・詩　入賞者

〈優秀賞〉

力（りき）へ

神奈川県横浜市　草　野　理恵子……11

〈優良賞〉

いつもいつも

松江市立母衣小学校　五年　土　本　陽　菜……12

講　評……13

感想文

小学生の部

〈優秀賞〉

心のやみをあぶり出す

松江市立八雲小学校五年　石倉　要

安土からの帰路、ぼくは飛行機に乗りこんだ。座席についたぼくは、お盆前に送られてきた「雪女夏の日の夢」を取り出し、とびらに筆で書かれた「石倉要君・二〇一五年～スーパーへるん講座～小泉凡」の文字を指でなぞった。中央には、八雲のさぎの紋があざやかな朱色でおされている。ぼくは、夏休み前半、「八雲の感性を通じ松江や日本文化を再発見する講座」に参加した。凡先生と八雲ゆかりの地をめぐり、八雲が心の目で感じ取ったことを作品にしたことを学んだ。この本は、参加記念として送られ、中でも何度も読み返したのは「果心居士」の話だった。

この話は、京都で不思議なかけ物をもつ果心居士とそれをほしがる信長や家臣、天下人になった光秀のおもてなしの様子が書かれている。信長とその家臣はかけ物の見事さに心をうばわれたが、果心居士を見下していたので、果心居士を殺し、かけ物をうばった。すると、かけ物からなぜか見事な絵が消え白紙になった。その後、果心居士は何度も殺されてはよみがえり、よく深さをこらしめるという不思議なことが起きる。ぼくは、安土で見た城のも型を思い出した。天守の全体が金でおおわれ、光っていた。これを見た人々は信長の力に圧とうされ、天下一と信じたにちがいない。ぼくは、富と力を見せつけている信長に対し、決して自分に負けない強い心と力をもった果心居士は、人間にとって大切なことを教える仙人のような存在だと思った。

最後に果心居士が現れたのは、光秀が十二日間天下を取った頃だ。果心居士は、光秀に客人としてもてなされ、たるが空になるほど酒を飲んだ。満足した果心居士は、お礼としてびょうぶの中の小舟を呼び寄せてみせた。そして、それに乗って日本を去ってしまった。心の貧しさをきらい、学識や人格のある「君子」を求めていた果心居士は、光秀の中に「君子」の心いきを見つけ、日本の将来に安心して成仏したのではないだろうか。果心居士は、人間の欲は計り知れず、制ぎょすることはむずかしいが自分自身を高め、他人や自分を幸せにする心が世の中をよくできると考えたにちがいない。

八雲は、心の目で果心居士と人間の欲望ややみを見つめた。そして、果心居士の強い意志を物語にしたのだ。

ぼくの心の目の中に、炎の中の安土城の天守がうかんできた。その炎に心のやみをあぶり出すようなはげしさを感じた。現代を生きるぼく達も富や力のよく望に負けてはいけない。飛行機から見える

夕やみの宍道湖に、果心居士が現れそうな気配を感じた。ぼくは、そっと問いかけた。「あなたは、今どこにいますか。」果心居士は言った。「君の、心の中。」

今度、凡先生に会ったら、八雲と果心居士の世界にぼくが入れたことを伝えてみよう。

〈優良賞〉

雪は、人間です。小泉八雲は、日本人です。

東京都豊島区立仰高小学校四年　山田夏帆

私は、「雪女」を何回も読んでいます。一番最初に読んだとき、こわくて、何回も本をとじました。でも、何だか読みたくなって、そっと本をひらいて、こわかった所から読みます。二回目読んだら少しこわくなくなってきました。けれども、また読んでいたら、「それは、わたしじゃ。……この私じゃ。お雪じゃ。あのとき、ひとことでもしゃべれば命をとると、たしかに言っておいた。じゃがの、あすこに寝ている子どものことを思うと、今となっては、そなたの命をもらうことはできぬ。こうなったからには、せめて子どもを大切に、だいじに育ててくだされや。子どもにもしつらい思いをさせるようなことがあれば、その報いは、きっとこの私がしますぞ。」の場面がこわくて、また、本をとじてしまいました。これでは、「雪女」を最後まで、よめません。心をおちつけ、がんばって本をひらいてよみました。そうしたら、雪女の気持ちが分かりました。もし、雪と巳之吉がまた一緒にくらしていたら、巳之吉がみんなにばらして、子どもがいじめにあったりするかもしれません。父親の命をとるいみが、雪は人間じゃないので、あまり分かってなかったのかなと感じていました。ところが、雪は命をとりませんでした。雪はここで、人間になったのです。

今年になって、また「雪女」を読みました。前、読んでから一年たっています。ふしぎな事に、こわくなくなりました。気になった事が出てきました。雪がいなくなったあと、雪女の気持ちは、分かるけれども、子どもたちは、どうやってくらしていったのかぎもんがわいてきました。十人いるので、一番上の子は、十才以下では、ありません。私と弟のようにふたごがいたのかもしれません。急にお母さんがいなくなって、お父さんと子ども達は、どういうふうに、くらしたのか気になりました。「おなかすいたぁ～」「洋服なに着るのぉ～」「遊びたいよぉ～」などいって、大さわぎです。でも、時がたって子ども達は大きくなります。上の子が下の子のめんどうをみられるようになります。しかし、かぜをひいた時は、つぎつぎとうつって家の中が、「かぜハウス」じょうたいになります。もっ

と時がたって親の気持ちが分かるようになった時、子ども達は、おじいちゃんになった、巳之吉を、いたわる子ども達になっています。ところがここには「お母さん」が出てきません。かなしい事です。私は、いつも心の中は、お母さんでいっぱいです。日本の子ども達は、お母さんが大好きです。その、お母さんが、いなくなるから、このお話は、こわくてかなしく、つらい話になるのです。

小泉八雲は、日本人ではありません。この話をかくとき、日本人の気持ちになってかいたんだと思いました。小泉八雲は、これをかいて日本人になったかもしれないと思いました。

中学生の部

〈優秀賞〉

小泉八雲をよむ～耳なし芳一～

学習院女子中等科（東京都）一年　前田　はるか

私は、夏休みに耳なし芳一を読みました。「耳なし芳一」という題名を見た時、なぜ耳なしなのであろうと思いました。読み進めると、目が全く見えず、法師として寺に住む芳一とでてきました。

私は、目が見えないように耳も聴こえないのだろうと思いました。

和尚がいない夜、いきなり「さむらい」という人物がでてきました。私は、本に書いてあるさむらいの声に息を飲みました。私は想像したのです。

蒸し暑い夜、時々冷たい風が琵琶を通り手に当たる。和尚がいないさびしい、かなしい夜。重い足音が近付いてくる音、地面が鳴る音。芳一にいっきに恐怖がおそってきたと思います。そして、自分に話しかけるずぶとい声。その上、目が見えない。

私は、思いました。このような想像をさせるのが小泉八雲という人ではないかと。

その後芳一はその男に連れられお屋敷に行き、琵琶を弾いてほしいと誰かえらい人に言われ、琵琶を弾く事になりました。そして、次の日もその次の日も同じ事が続きました。

私は、芳一は幸せをつかんだのだと思いました。しかし、それは幸せではなかったのです。芳一が毎晩出かける事を知った和尚は芳一に聞きますが、芳一は口止めをされていて喋りません。和尚は、下男たちに芳一の後をつけさせました。

すると、そこには平家と源氏の争いに関わる安徳天皇の御陵がありました。そこで一人芳一は琵琶を弾いていて周りには亡者の炎が青白く燃えていました。

私は、ここでそういう事だったのかと思いました。

下男はすぐに和尚にそれを知らせ、和尚は実際に起きている事を芳一に知らせました。

私は、「もう安心だ」と思ったのも束の間、問題の〝今晩〟があったのです。

用事のあった和尚は芳一の全身に亡者から身を守るお経を書いて出かけました。そして、〝今晩〟がくると芳一は和尚の言う通りに動かず、さむらいを待っていました。耳にだけお経が書かれていなかったなどと思いもしなかったでしょう。想像するだけでも体がこわばります。

小泉八雲は外国人として日本に来たけれども日本人の心の中を知る人なのだと思いました。

私は、今回耳なし芳一を読んで芳一、和尚、亡者、それぞれの立場に胸が痛くなりました。それぞれが必死でした。芳一はこの必死さと亡者の思いを通して、世に名高い琵琶奏者になりました。

演奏には毎回相当な疲れが伴ったでしょう。けれども、色々な思いを抱いている芳一は、演奏せずにはいられなかったのでしょう。

私にもこの先、そこまで打ちこめる何かが見つかるだろうかと思いました。八雲の細やかな観察や人を思う気持ちなどを頭に置いて生活していこうと思いました。

〈優良賞〉

「雪女」を読んで

松江市立湖北中学校二年　落　合　乃々葉

私は、この作品を昨年も読みました。

何度も、何度も読み返すことでより深入りして読むことができます。というのは、昨年この作品を読んだ時と、今もう一度読んだ時とでは、違った感想を持ったからです。

今回は〝作者が最終的に伝えたかったことは何か〟ということに視点を置いて、作品を読みました。

私が、この作品の中でとてもドキドキした場面は、巳之吉がお雪に、雪女の話をする所です。

巳之吉が、

「十八の年に会ったふしぎな出来事を思い出すよ」

というと、お雪は、背中をむけたまま、

「その方のお話をして下さいな。あなた、どこで、その方をごらんになりましたの」

と巳之吉に言います。

でも、私はあの時、あなた、ぜったいに言わないでおくれ。というお雪からの最後の忠告だったように思います。

しかし、巳之吉は、あっさりとペラペラ話してしまうのです。

昨年までの私は、ここでとってもおもしろいなと思っていましたが、今読むと、この時お雪、いや雪女はどんな気持ちだったでしょうか。今まで、お雪として、幸せな家庭を築きもう言わないなと安心したころだったのではないでしょうか。その気持ちを考えると、とっても悲しい気持ちになります。

そして、そばに座っている巳之吉の上へ身をかがめるようにして、鋭い叫び声を浴びせかけます。

そこには、巳之吉に対しての信じていたのに、という怒りよりも悲しさが強かったんだと思います。

雪女のことを話すと命をもらうと言っていた雪女ですが、お雪となり十人の子供を持つ母となると、あすこに寝ている子供のことを思い、巳之吉の命を取ることができなくなります。そして最後に、

「こうなったからには、せめて子供を大切に、だいじに育ててくだされや。子供にもしもつらい思いをさせるようなことがあれば、その報いは、きっとこのわたしがしますぞよ。」

といい白くきらめく霧となり、窓から出ていきます。

雪女、いやお雪が最後にこの言葉を選んだのは、子供達への愛情からだと思います。約束を守れなかった巳之吉ですが、お雪は、せめても、と最後の願いを巳之吉にたくしたのです。

小泉八雲が愛情を込めて作った作品だからこそ、こういう感想が持てるんだと思います。

小泉八雲の本がどうしてこんなに長い時間日本人に愛されるかとても不思議でした。

それは、たくさんの愛だと思います。一人一人の登場人物の気持ちを読者に感じとらせてくれるこの作品はとてもすばらしいと思います。

もっといろいろな作品を読んでいく中でもっと小泉八雲のことを知りたいと思いました。

一般の部

〈優秀賞〉

「停車場にて」考：現代を生きる我々が、「父性」を取り戻すための道標として

静岡県静岡市　高田　雄一郎

タイトルの穏やかさとは裏腹に、福岡で逮捕された凶悪犯人が熊本駅に護送される一幕から始まるこの作品、読了後に、実際の現場にいたような臨場感もさることながら、ラフカディオ・ハーンの停車場での人物描写と、日本人の「父性」に関する洞察に、私自身、

惹かれるものがあった。それは、この作品に込められた、ハーンの強い意志の存在を感じたからだ。では、その「強い意志」の正体は何か？　それを探るため、登場人物の心象風景等を踏まえつつ、考察を試みた。

刑事が、遺児に示した「父性」

冒頭から登場する、警官を殺害した犯人を護送中の刑事は、停車場の前で、警官の未亡人ではなく、遺児に直接語りかけ、

「坊や、この男が四年前お前のお父さんを殺したのだよ」と、犯人と直接対面させようとする。怯(ひる)む遺児に、刑事は「よく御覧、これは坊やの勤めだ」と、有無をいわせず、犯人を直視させる。それに応える形で遺児もまた、泣きながらもしっかりと彼の「勤め」を果たす。

刑事は、大衆の面前での遺児との対面で、犯人に自らの罪深さを認識させる事の他に、遺児に何を伝えたかったのか？　それは、彼なりの方法で、遺児に「父性」の一端を教示する事ではなかったか。男子にとって必要なのは、母親との心理的な融合状態や支配から脱し、社会のルールや掟を身に着け、現実を直視しつつ、男として責任を果たしていくことであり、父親にはそれを教え、導く役割がある。刑事は、亡き父親の代わりにその役割を果たすには、遺児に父がいない理由、そして父がいなくとも、生きていかねばならぬ現実を知らしめる事が、「父性」を示す最善の方法と考え、敢えて、父を殺(あや)めた犯人と対峙させるという、遺児にとって苛烈(かれつ)な、男としての「勤め」（＝責任）を課したと考える。そして、この「勤め」を乗り越えた事で遺児の心に刻み込まれた「父性」は、彼が独りで現実社会を強く生きていく上での、拠り所になり得る事を予感させる。

犯人の「父性」の発露と、周囲への伝播

犯人は、遺児との対面により、「御免なあ、坊や、許してくれ」と、悔恨(かいこん)の情を叫び、自身の罪への懺悔(ざんげ)と共に、人間性を取り戻す。犯人のこの改心と覚悟は、刑に服す前の一種の心のカタルシスであり、その原動力は、犯人の心の奥底に宿る「父性」である。そして、犯人が遺児に示した「父性」は、犯人を捕縛する執念の鬼と化していた刑事や、日本で一番血の気の多い、この光景を見ていた群衆の「父性」と共鳴し、涙という心のカタルシスを呼んだ。

ハーンは、水面に物の落ちた時に広がる波紋の如く、刑事、遺児、犯人を起点として、それを取り囲む群衆へ「父性」が伝播した、その神々しい停車場での光景に、日本人の心の深淵(しんえん)に根付く、「父性」の本質である子供への無垢な愛の情を見たのだろう。

ハーンが「停車場にて」に込めた、彼自身への思い

ハーンは、日本人の精神世界を、西洋人特有の偏見に囚われない、彼独特の視点で暗黙知から形式知にして著述した作品が多い。その中でも、「停車場にて」は異彩を放っていると思う。それは、

本作で日本人の「父性」を読者に語りながら、同時にその文章や文脈から、彼自身を奮い立たせるような、強い決意を感じるからだ。

彼は、その評伝から複雑な家庭環境で育ち、実父からは本作品の遺児と同様、「父性」を十分に教示されていないことが伺える。そのような生い立ちの彼は、本作が発表された年に、長子を授かるにあたり、自身の「父性」とは何かという、心の葛藤があったのではないか。子を持つ父となり、家庭を守る男としての責任を前にして、それを全うしなかった実父を反面教師にしていた彼は、本作の執筆過程で、自分の境遇と遺児のそれを重ね合わせ、登場人物の心象風景を通して、彼の視点で日本人が持っている「父性」を考察し、そして自身の持つべき「父性」のイメージを構成しつつ、父になる覚悟をかみしめながら、ペンを走らせていたように思えてならない。

私自身、子を持つ父親として、「父性」とは何かをいつも自問自答している。私が「停車場にて」に惹かれたのは、私の問題意識と、この作品に込められたハーン自身の切実な思いが、「父性」というキーワードで共鳴し、改めて「父性」とは、その本質とは何かを、私に考えさせる良い機会を与えてくれたからかもしれない。

結びに代えて

一般に「父性」は、子との関係性が生物学的な母性のそれと異なり、心理的、社会的であり、時代や社会の変化に影響を受けやすい。事実、ハーンが懸念していたように、日本は、急激な近代化、産業化の進行により、利益追求が優先する社会に変質した。その結果、父子の接点が脆弱となり、父親の存在感が希薄化した現代は、「父性なき時代」になりつつある。

このような時代に生きる我々が、本来の「父性」を取り戻すための道標として、ハーンの「停車場にて」は、時代を超えて読み継がれるべき作品であると考える。

〈優良賞〉

戦後七十周年と小泉八雲

福岡県筑紫野市　二宮正博

平成二十七年は日本にとって戦後七十周年という大きな節目の年であった。それは日本の歴史上最大の惨禍となった先の大戦を振り返り、再び悲劇を繰り返さないように全国民が平和への思いを新たにする年として位置づけられている。

国も現在の日本の平和の礎となった戦没者等の尊い犠牲に弔意の意を表し、戦没者等の遺族に対する特別弔慰金を今年度も支給することを国会で決定している。このような戦没者等の遺族への給付金は戦争の悲劇に巻き込まれた人々の存在を浮き彫りにする。父母

等に対する給付金は、子や孫を亡くし子孫が絶えた寂寥感や孤独感に包まれて生きる人々。妻に対する給付金は、一心同体である夫を失っただけでなく生計の中心者を失い経済的困難に見舞われた人々。戦後は七十年を経た今も未だ終っていないことを特別弔慰金は示している。日韓関係に軋轢を生じさせた従軍慰安婦の問題も戦争が招いた悲劇である。

ところがこの日本史上最大の悲劇を百二十年前に予見した人が居る。他ならぬ小泉八雲だ。彼は日清戦争の勝利で日本全国が沸き立つ中で、一八九五年五月五日に『戦後に』の中で次のように書き記している。

『日本帝国の軍事的復活――それが新日本の真の誕生なのだ――は日清戦争の勝利と共に始った。戦争は終り、将来は曇って暗いけれども、それでも大きな希望を約束しているかに見える。それに、今度の戦争よりもさらに雄志をのばして、もっとずっと永続する成果をあげるために、どれほどの難関が前途に横たわろうとも、日本はもはや危惧したり逡巡したりすることはないにちがいない。しかし日本にとっての将来の危険はまさにこの途方もなく大きな自信の中にあるともいえよう。』

確かに日本はこの後、彼の予言通りに日露戦争に勝利し、第一次世界大戦でも勝利して更にその雄志を伸ばして、その版図を大東亜共栄圏の構想の下に朝鮮半島の併合から中国大陸の満州国設立へ。南方も台湾統治から東南アジア、南洋諸島へと広げて行き、遂には欧米諸国と摩擦を起こした末に、武力による解決の道を選ぶ事になる。小泉八雲が描いた日本の未来予想図は不幸にも的中したのだ。

それでは何故、小泉八雲はこのような日本の未来について正鵠を得た見方が出来たのだろうか。それは単なる在日外国人の岡目八目ではなく彼が欧米の歴史について深い造詣を有していたからに他ならない。西欧諸国の帝国主義や植民地主義の興亡の歴史を元にして彼には見えていたのだろう。先進国の西欧列強をリスペクトしつつ、肩を並べる為にその後を猛スピードで追い掛けて行く日本の辿る道が。まさに先行する諸国の歴史を学び、その上で日本の文化を研究し、日本人自身が自覚していないその心まで洞察するに至った彼だからこそ持ち得た慧眼である。一八九六年に当時人口六十七万の大阪が二百万を超える時が来ることも経済の動きで予見している。

小泉八雲が見ていたのは日本の未来だけではない。ある保守主義者の目を借りて、当時のイギリスの繁栄は世界に覇を唱えた植民地主義によるものでその終焉と英国経済の斜陽化について予言している。又、日本と中国の経済関係についても、日本の一友人の言葉として『もし中国が西洋の工業生産方式を採用したら、日本より安い製品を武器にあらゆる市場で我々に勝つことでしょうね』と語らせた上で、『ただの低価格生産ということになったら日本はとうてい

支那にかなうものではない』から日本の取るべき道を模索するように示唆している。彼が『日本の心』の中で記していたことは今まさに現実の問題として降り掛かって来ている。東西の歴史に通暁した小泉八雲の至言は現代でも一考に値する。ここに東西古今の歴史を学ぶ大切さがある。

天皇陛下も八十二歳のお誕生日を迎えられる十二月十八日の記者会見で、戦後七十年について「様々な面で先の戦争のことを考えて過ごした一年」と振り返られている。そして「年々、戦争を知らない世代が増加していきますが、先の戦争のことを十分に知り、考えを深めて行くことが日本の将来にとって極めて大切なことと思います」と語られている。まさにこれは、今後の日本のあり方を考えていく上で、歴史に学ぶ大切さを述べられたお言葉である。

過去の歴史はどんなに反省し後悔してもその否定的事実を変えることは不可能である。しかしその歴史を学ぶことで得た教訓を踏まえて望む未来は変えることが出来る筈だ。

歴史に「もし」はないが、もし百二十年前に当時の日本人が小泉八雲の日本の将来に対する警鐘を真剣に考えていたならば、それでも日本は同じ破滅への道を辿っただろうか。歴史は繰り返す。戦後七十年を迎えた今、私たちは改めて小泉八雲の著書を紐解き、彼が日本の為に遺してくれた数々の示唆に富むメッセージに対して謙虚に耳を傾け、未来に向かって進んで行くべきではないだろうか。

作詞・詩

〈優秀賞〉

力（りき）へ

神奈川県横浜市　草野　理恵子

力　君と耕也はよく似ているね
耕也はおばちゃんの子どもだよ
永久に子どものままだね
力もずっと二歳なの？
耕也もこの前「二歳になったね～」
ってほめられたよ
ほんとは二十二歳だけどね
でも力はでも小さな子と遊べていいね
耕也は誰とも遊んでいないよ
お母さんとお父さん
時々　お兄ちゃんとお姉ちゃんと遊ぶだけ
力が少しうらやましいな

力は竹ぼうきが好きなの？
耕也はね双眼鏡だよ
双眼鏡って言ってもトレペの芯に
折り紙を貼ったもの
それで世界を覗いて
「シュビドゥビ……」って歌うよ
それで覗くと世界中旅できるみたい

え！　力は死んでしまったの……
脳の病気で……
苦しかった……？
耕也はね今度生まれてくる時も
耕也のままでいいと思うよ
力のお母さんもきっとそう思ったよ
力のままで
またお母さんの所に生まれてほしいって
ほんとはね

お屋敷の赤ちゃんの手のひらの
「力ばか」の文字
力のお墓の土でこすって消えたのかな
力のお母さんは
「ちょっと　消えなかったらいいな」
って思ったかもしれないね

じゃあ　力

耕也のことも天国から守ってね
双眼鏡が要るなら貸すよ
よろしくね

〈優良賞〉

いつもいつも

松江市立母衣小学校五年　土本陽菜

いつもいつも
あめをかう
白い着物を着て
いつもいつもあめをかう

いつもいつも
あげていた
赤ちゃんにあめを
いつもいつもあげていた

いつもいつも
お世話した
ゆうれいになっても
いつもいつもお世話した
死んでも
赤ちゃんのために
あめ屋を連れてきたのは
よろしくお願いしますって
赤ちゃんを育ててほしかったから

講　評

《感想文》

◇小学生の部

今回出品された作品も、どれも怪談という作品のみならず、作者である小泉八雲に親しみを感じ、作品に浸り込んでの感想が表現されており、好感がもてた。

特に優秀賞の作品は、夏休みに松江市で三日間実施された「スーパーへるんさん講座」に参加し、小泉八雲に関してしっかり興味を持って学び、その際に紹介された「果心居士」の感想を述べたものである。そのため、小泉八雲の思いをしっかり受け止めながら読み深めていることがよく伝わってきた。また、迫力ある文体を用いての表現力は、出品者が感動をもって読み進めたその思いがしっかり伝わってくるものとなっていた。

（講評者　井田　佳彦）

◇中学生の部

昨年より応募数が減っているが、それぞれの作品から中学生の健康的でみずみずしい感性で描かれた小泉八雲の世界が感じられた。

優秀賞作品では『耳なし芳一』に登場する三者、「芳一」、「和尚」そして「亡者」のそれぞれの立場に、筆者は思いを寄せている。三者が「それぞれ必死だった」と述べる言葉に、八雲が描く人間らしさをしっかりと受け止めて感想文を書き上げた筆者の感性が光っている。

優良賞作品では『雪女』の世界を「愛」を視点にしてアプローチし、うまくまとめている。筆者は、雪が巳之吉のもとを去っていく場面に、子を思う母の愛情が描かれている、とする。この作品もまた八雲の描く登場人物の人間らしい温かみがしっかりと伝わる良作である。

（講評者　湯浅　哲司）

◇一般の部

優秀賞の「『停車場にて』考：現代を生きる我々が、『父性』を取り戻すための道標として」は、全体として論のまとまりも良い感想文である。ハーンは複雑な家庭環境で、実父からは本作品の遺児と同様、「父性」十分に教示されていないことが伺えるのであり、そのような生い立ちのハーンは、本作品が発表された年に長男一雄を授かり、「父性」とは何かということを考えたに違いない。

優良賞の「戦後七十周年と小泉八雲」今までにない視点の感想文である。佳作の二点、「日本人の微笑」「水飴が教えてくれた愛」は、硬、軟、対照的な感想文であった。

（講評者　日野　雅之）

《作詞・詩》

「力（りき）へ」は、「力ばか」という怪談を題材としている。亡くなった少年「力」に語りかける形で、「力のお母さん」の思いを想像しつつ、そのなかに「耕也」への思いをにじませていく。決し

て強い言葉を連ねているのではないが、読み取られるのは芯の通ったまっすぐな思いである。

「いつもいつも」は、飴買い幽霊の話を題材に、小学生らしくじつに素直で素朴な味わいに仕上がった一篇である。「いつもいつも」の繰り返しが、赤ん坊を思う母親の愛の強さを巧まずしてよく表現している。

「Fuji-no-Yama」は、八雲の富士登山（一八九七年）を題材にした詩で、怪談を題材にした応募が多い中で個性が光った。八雲の難儀な登山を追体験しながら、作者の人生とつなげていく展開もよかった。

（講評者　岩田　英作・山根　繁樹）

【審査員】井田　佳彦　岩田　英作　坂口　妙子
谷　由美子　日野　雅之　山根　繁樹
湯浅　哲司　吉田　紀子
（五十音順）

表紙写真

松江時代の小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）

1891（明治24）年　小泉家蔵

平成27年度

「小泉八雲をよむ」
感想文　作詞・詩　入賞作品集

平成28年３月

編集・発行　松　　江　　市
松江市教育委員会
八　　雲　　会